

課題名	14 野菜の栽培生理解明	分類	①
	ブルームレス台木を使用した促成キュウリ栽培における整枝方法と栽植密度		
試験研究年次	1~2年(完了)		
I 目的	ブルームレス台木を使用したキュウリの促成栽培において、長期間、収量や品質を安定させるための整枝方法や栽植密度について検討し、栽培技術改善に資する。		
II 試験方法	<p>1 供試品種 穂木 シャープI (埼玉原種育成会) 台木 スーパー雲竜 (久留米原種育成会)</p> <p>2 試験区の構成 試験I 整枝方法 摘心栽培とつるおろし栽培について第1図のように行った。(1年) 試験II 栽植密度は10a当たり900株、つるおろし本数を1株当たり3、4、5本とした。(2年) 試験III 栽植密度は10a当たり900、1,200、1,500株、つるおろし本数を1株当たり3本とした。(2年)</p> <p>3 試験規模 1区7株 2反復</p> <p>4 耕種概要 (1) 播種期 1年10月1日、2年9月26日 (2) 定植期 1年11月2日、2年10月26日 (3) 栽植密度 1年 うね幅 220cm、株間75cm、2条植え、10a当たり1,212株 2年 うね幅 200cm、1条植え (4) 施肥量 10a当たり N=70kg、P₂O₅=70kg、K₂O=70kg</p>		
	<p>親づる1本、親・子づる2本、子づる2本 子づる4本、摘心→つるおろし 摘心栽培 つるおろし栽培</p>		
	第1図 試験Iの整枝方法 (Xは摘心を示す)		
III 主要成果の概要	<p>ブルームレス台木を使用した促成キュウリ栽培の整枝法は、親づるを摘心して伸長した子づるをつるおろしする方法が、摘心栽培に比べて長期間にわたり草勢が維持でき、収量や品質が安定する。</p> <p>つるおろし栽培では、10a当たりの栽植本数は1,200株程度、1株当たりのつる数は3本が収量、品質とも安定する。</p> <p>1 つるおろし栽培は、摘心栽培と同じ程度の収量を確保でき、曲り果や短形果が減少して上中物収量が5%程度増加する。</p> <p>2 10a当たり栽植密度が900株の場合は、子づるを伸ばして1株に3本つるおろしする整枝法が収量及び上中物率ともに収量が優れる。つるおろし本数が多いと収量は減少する。</p> <p>3 つるおろし本数が1株3本の場合は、10a当たりの栽植本数は1,200株植えが最も収量が多くなる。</p>		

IV 主要成果の具体的データ

第1表 整枝方法と収量及び品質 (1年)

整枝方法	仕立て方法	収量		上中物率 %	不良果の割合 %			
		総合 t	上中物 t		曲がり果 %	尻太果 %	尻細果 %	短形果 %
摘心栽培	親づる1本	9.7	3.1	32	26	20	11	11
	親・子づる2本	9.2	2.8	31	23	22	6	12
	子づる2本	8.7	3.1	36	26	26	9	7
つるおろし栽培	子づる4本	10.1	3.7	37	24	27	7	9
	摘心→つるおろし	9.3	3.9	42	21	26	9	5

注) 収量は12月から4月までの10a当たり収量

第2表 つるおろし本数と収量及び品質 (2年)

つるおろし枝数	収量		上中物率 %	不良果の割合 %			
	総合 t	上中物 t		曲がり果 %	尻太果 %	尻細果 %	短形果 %
3本	12.0	5.1	43	31	13	13	15
4本	11.6	3.9	34	43	16	14	9
5本	9.3	3.4	37	39	15	15	11

注) ① 収量は12月から6月の10a当たり収量 (以下同じ)

② 栽植密度は10a当たり900株

第3表 栽植密度と収量及び品質 (2年)

10a当たり栽植密度 株	収量		上中物率 %	不良果の割合 %			
	総合 t	上中物 t		曲がり果 %	尻太果 %	尻細果 %	短形果 %
900	12.0	5.1	43	31	13	13	15
1,200	15.5	6.5	42	31	15	10	12
1,500	14.4	5.2	36	38	17	11	18

注) つるおろし本数は1株当たり3本

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 ブルームレスキュウリ栽培の資料とする。
- 2 土づくりに留意して活着や初期生育を促進し、側枝の発生伸長を促すとともに、施肥及び病虫害の予防に心がけ、長期間の草勢を維持する。

VI 今後の研究上の問題点

VII 資料名
2年度 福岡県農業総合試験場園芸研究所 野菜試験成績書